

北陸大学図書館報

NO.47



皆さんは普段どのくらい図書館を利用していますか？今年度の図書館委員の先生方からいただいたメッセージを読んで、図書館や読書に、より親しみを持っていただければと思います。

◆◆ 私と図書館

一昔の北陸大学図書館のご紹介

図書館長・薬学部教授（北陸大学薬学部〇回生） 鍛治 聡

一番最初に図書館に入ったのは、一年次生の6月頃でしたでしょうか。部長が「かんかんに怒っていたよ。」と聞かされ、あわてふためきつつ探し訪ねて図書館の四階でした。30年以上昔のことです。そう、昭和の時代のこと。故に、携帯電話などなく人づてであちへ行き、こちらへと友人とさまよい歩き、ようやくご対面となりました。開口一番大きな声で「****」と言いたかったところでありましょうが、さすがに部長！ものすごい目つきで我々を一瞥されたものの、図書館のルールは厳守されました。因みに、当時は薬学部のみで、太陽が丘の学生さんはご存じないでしょうが、薬学部生であれば現在の学生さんもよく知っている“本部棟”の三階から上が図書館でした。一階は事務局、二階は理事長室、学長室、三階は会議室と図書館受付、および学術雑誌コーナー、四階は多くの書架と専門書が幅を利かせておりました（文学書は肩身が狭く細々と）。特筆すべきは、三階と四階が螺旋階段での連絡でした（第一薬学棟のとある場所に、螺旋階段は存在する）。加えて、松雲公の書物（本学の学生便覧を見てください）がさりげなくガラスケース内で展示。勿論エレベータもあったはずですが、使った覚えはありません。思い返すと何もかも懐かしい・・・と言いたいところですが、かなり記憶の彼方です。ですが、現在のように床、壁、そして机、椅子のことごとくが暖かみのある木製ではなかったことは覚えています。北陸大学の図書館を使われる皆さん！今の環境は極めて恵まれているのですよ。

話を戻すと、そうです。私の北陸大学図書館初入館は、読書でもなく勉強でもなく、叱られるためだったのです。まあ、狙ったわけではないのですが、大声で怒鳴られたり、嫌みを言われたりせず、謝罪をして一件落着。だけどそのせいでしょいか、11月の学園祭では霰の降る小立野でプラカードを持ってのサンドイッチマン。大昔は、スクールバスで小立野の大学病院前に乗り付けて、お客さんを勧誘していたのですよ。学生諸君！ついでに言わせてもらえれば、平成となり太陽が丘での開催となってしばらくは、ホットドッグやフライドポテト、etc. を薬学キャンパスの四年次生や教員に販売しに来ていたのだよ。平成15年ぐらいから、学生の前売り券を如何にかわすかの工夫すらしやしない（来ないから）。

図書館からだいぶ離れたので、また少し戻って。Youは何しに図書館へ？部長のことですよ。かの人は▽▽学実習のレポートを、論文や学術書を活用しつつ作成されていました。一人だけとは申しません。実習の班で集まっていたのでしょうか。すごいなとその一瞬には思いました。当時、この実習はレポートをグループで提出する方式で、今の基礎ゼミとも通じるものがあつたかも。連帯責任もあつたのでしょうか。仇やおろそかにはできません。どこに何が書いてあるか、足で稼いでいたようなものですね。スマホなどで検索どこ

ろか、ネット環境なんて10年単位で待たねばならぬ時代でしたもの。因みに、自分は教科書ですませたくち。物足りなかったら教科書の参考文献を図書館で、もそもそと調べたような記憶があるような、ないような。いや、正直に・・・教科書は十二分に分厚い。勤めてからは、多くの先生がたが経験されたであろう、ネタ拾いのため図書館でケミカル・アブストラクトとにらめっこ。仕事と読書の両立は困難だったなあ。

当時の若者が読書をしないことは、今と変わらなかったと思います。妙に覚えているのは、一年次生の夏休みの宿題に読書感想文があり、その宿題を出したのは当時の物理学の先生でした。文学の先生が読書感想文の宿題ならいざ知らず、物理の先生が出す物理ネタの読書感想文をみんなはよく提出するモンだと私は感心しておりました。私といえば、NECの最先端のチョイ落ちのPC8001をアルバイトで頑張って購入。プログラムなんぞは自分で入力、プログラム言語(Basic?)は本を読んでマスター(今はほとんど忘れたけれど)。これも読書だったかしら。白状するならば、分からんところはくだんの物理の先生に喰らいついていきました。物事はすべからず、やれと言われてやるよりも自らの意思でやる。効果の違いは比較にならないです。ネット環境の充実で、それこそ寝ころびながら世界が観える。楽しんで効率よく色々調べられます。時間が稼げます。その稼いだ時間に、結果があっさりとして示される情報社会を少し離れ、文字からイメージを起す読書に浸ってみてもいかがでしょうか。私の好きな作家(小林信彦氏)の作品の中で「フォーサイス 見てきたような嘘を書き」。SF作家を称しての川柳ですが、よくよく考えると文字を追いながら“見てきたような嘘”を“読者”が空想できていたのだなと思います。

読み取って、要約して表現する。書評もそうですが、医療面接もこれと通じます。まして、言葉をツールとする領域では、頻度がより高いと思われます。ネット社会で稼げた時間で、昔々のように文字をたどってみてもよいのではないのでしょうか。ネタが特定の学部偏って申し訳ありません。でも、この手の話を他学部の先生にもお願いできないかなあ〜と思いつつ、お目を通していただきありがとうございました。



薬学本部棟(3・4階が図書館薬学部分館)



図書館所蔵の『加賀松雲公』上・中・下巻

◆◆ 「読文字」「眺書」のすすめ ◆◆

薬学部教授 手塚 康弘

タイトルの『「読文字」とか「眺書」って何?』と思ったと思う。通常なら、自分の読書体験などを元に「読書のすすめ」や「図書館のすすめ」を書くであろう。私もそのつもりだったが、自分の読書体験や図書館との関わりを思い返すと、残念ながら他人にすすめられる内容ではなかった。そこで、無理やり捻出したタイトルがこれである。

さて、私の一番古い読書?の記憶は手塚治虫の漫画(おそらく『ビッグX』)である。小学校入学前、親の知り合いの近所の貸本屋で自由に本を借りさせてくれた。そこで私が借りたのは当然のように漫画である。それ以来、私が読むのは漫画ばかり。それらの漫画の影響か、その後読んだのはSF小説にミステリー小説。1日に1冊のペースで盛んに読み漁ったものである。高校になると文学作品にも手を出したが、主として「第

三の新人」と呼ばれた人たちの、どちらかというと砕けた（アダルトの匂いのする）作品が中心であった。その結果、理系に進み研究者になる道を選び、医学部は無理そうなので薬学部に進学する事に。また、親に聞いた話だが、小学生の頃に盛んに百科事典を見ていたらしい。それで勉強するのではなく、おませな子供の興味のままに様々な事をこっそり見ていたらしい。それらは「読書（本を読む）」というよりも「読文字（文字を読む）」であったと思う。

この様に、「読書」と大げさに構えるのではなく、ネットでも漫画でも良いので、文字を読むという事を行なってはどうだろうか。その後、紙の本のページをめくりながら、読みたいところ以外もチラチラと眺めよう（これが「眺書」）。さらには、その本の近くに並んでいる本も眺めて、予想外の本との出会いを楽しんでみる。昔なら本屋で立ち読みという手もあったが、今は無理だろうから様々な本が並んでいる場所として図書館を有効利用してはどうかだろうか。



◆◆ 視覚と聴覚 ◆◆

薬学部講師 倉島 由紀子

今年の夏も暑かったですね。この図書館報が発刊される頃にはすっかり秋めいていることと思いますが、秋と言えば、芸術。この点で金沢はとても良いところですよ。大学から30分で美術館にも音楽ホールにも行けてしまいます。これはすごく恵まれている環境なのです（何十年か生きると実感できます・・・）。

ところで皆さんは目を閉じながら音楽を聴いたことがありますか？何種類もの楽器で演奏されるクラシック音楽で試すと分かり易いと思いますが、目を開けて演奏者を見ながら聴くのと、目を閉じて音だけに集中して聴くのでは、耳に入ってくる音の質が違ってきます。音を聴き分けられるというか・・・。恐らく、目を開けて聴いていると視覚情報が多すぎて、聴覚が散漫になってしまうためだと思います。

読書は「目を閉じて音楽を聴く」ことに似ているように感じます。読書は目で字を追いますが、文字情報から得られる情景を自分で自分の頭の中に描いてますよね。その時、耳からの情報はほぼシャットアウトしているでしょうから、「耳を閉じて文章を味わう」状態。

それに加えて、登場人物の感情すらも文字情報をいったん咀嚼してから感じるの、テレビや映画などで映像が勝手に目に入ってくるのとは異なり、様々な事を自分のペースで感じることができる。五感のうち視覚だけに集中しているので、受け取る情報に対して敏感になれるのでしょう。

日頃、何かと気ぜわしい学生の皆さん。「読書の秋」という雰囲気によって、自分のペースで本の世界に浸ってみては？



◆◆ 哲学館と読書 ◆◆

経済経営学部教授 南谷 直利

図書館のFD・SD研修の一環として、先生方と一緒に2019年1月19日、西田幾多郎記念哲学館（かほく市）を見学した。西田氏は『善の研究』を著し、我が国を代表する哲学者の一人である。かほく市で生まれ、第四高等学校を中退し、その後東京帝国大学で哲学を専攻した。修了後に母校の四高に着任するが、哲学ではなく柔道の教員として教鞭を執ることになる（頭脳明晰で柔道が強い）。柔道教員からの始まりであったが、後に京都帝国大学教授として、哲学界に異彩を放つ。

その西田氏の哲学館には図書室も併設されており、多くの学術書が所蔵されている。哲学館の地下1階の中央広場には推薦本が並べられ、長い炬燵も置かれていた。「哲学館に行くと読書を勧められる」。哲学で休む、読書で休む、炬燵で休むなど、人には休む営みが必要である。哲学、読書、炬燵の風景から、日々の余裕やゆとりを持つ大切さを感じた。

学生の皆さんも学業や課外活動で多忙かもしれないが、読書による適切な休息を取ってはどうか。学習上のレミニッセンス効果（休息による学習成績の向上）や、スポーツトレーニングの超回復の期待もある。

本学の図書館は、研究や修学に役立つ知識の提供を目指している。学生の皆さんには、図書館に所蔵している古典的書物を多く読んでもらいたい。人は生きていて悲哀になれば立ち止まり、考え悩む。哲学が、人の悲哀を示唆しているのかは分からない。人生で哲学にかかわる場面（読書）は多々あり、それは「より善く生きる（ソクラテス）」ための休息かもしれない。

哲学館の思い出の日は、読書の重要性を再認識できた「善い一日」であった。



当時話題になった炬燵



◆◆ 火かき棒事件とまともな「変人」 ◆◆

経済経営学部教授 松本 和彦

「神が到着しました。五時十五分の列車に乗ってきた、かれに会ったのです」。1929年1月のことである。これは、かれがケンブリッジに帰還したことを伝える、ブルームズベリー・グループの中核的存在であったメイナード・ケインズの書簡に見られる言葉である。この言葉によって、かれに対して、いかに周囲の者が畏怖し大きな期待を抱いていたかが窺われる。

1946年10月25日ケンブリッジ大学、キングズ・コレッジのギブズ棟H3号室で、ある事件が起きた。当日の晩ここでモラル・サイエンス・クラブの例会が行われた。哲学の教授と学生たちが毎週行っている討論会である。普段はメンバーはせいぜい15人くらいであったが、この時の講演会はゲストを招いており、例外で倍近くの学部生や大学院生や教官たちで室内は込み合っていた。今から述べる三人の大思想家が一堂に会したのはこの晩が最初で最後であった。

ゲスト講演者は言う。「かれとその一派は、予備的なことがらをとりえて、それが哲学だといいはっている。その予備的な考察の外にでて、もっと重要な哲学の問題を考察しようとしなさい」。それに対して、かれは反論する。「純粋数学や社会学にしか、もはや〈問題〉などというものはない」。この夜の主役は、もちろんウィーンを離れてイギリスにきたこれら二人の亡命哲学者である。

しかし突然、一瞬の反射的動作のようにかれの手が炬燵のほうに伸び、火かき棒をしっかりと握った。かれはこれを手にして、自分の語る言葉の区切りごとに痙攣するように棒を突き出し始めた。周囲のひとりから声が発せられた。「その火かき棒を床に置きたまえ」。その後、かれは火かき棒を投げ捨てて、その場に立ち上がった。かれは言う。「あなたはいつも僕を誤解するね」。それに対して、相手は言う。「違うよ。物事をごっちゃにするのは君のほうだ。いつもごっちゃにするんだ」。かれは扉を叩きつけるように閉じて、部屋から立ち去った。闘いは終わったのではない。単に消滅してしまったのだ。

H3号室で哲学の論争がどのように繰り広げられたかは、正確に再現することはもはや不可能であろう。しかし、このできごとが20世紀の哲学の分水嶺を予兆する象徴的な事件であったということは間違いない。

激怒したかれにとっては、概念を言語学的に緻密に調べることはそれ自体に価値があることである。それが哲学という偏頭痛を癒すために必要な唯一の治療薬であった。他方で講演者にとっては、言語分析はきわ

めて役に立つにせよ、本当に重要なものである哲学の現実の「問題」を検討するための装置にすぎなかった。つまり、二人の論争は 20 世紀の哲学における言語の重要性をめぐる大きな対立を際立たせる大激論であった。一方では、伝統的な哲学の「問題」とは、単に言語がもたらした「もつれ」にすぎないと考える人々がいる。他方で、哲学の問題は言語を超えていると考える人々がいる。これら二つの陣営の間には深い不和があったのである。それでは、その後どちらの陣営が勝利したのであるか。

これらの登場人物が誰なのか、皆さんはすでに気づかれたかもしれない。そう。

その「神」、「かれ」とはルートヴィヒ・ウィトゲンシュタインであり、「講演者」とはカール・ポパーである。ウィトゲンシュタインは 1929 年 1 月にケンブリッジに復帰し本格的に哲学の研究に没頭することになる。かれの魔力はまず眼の輝きで相手に伝わる。謎をかけるようなものもいいも魅力のひとつであり、物事を穏和に語ることでできない人物であった。また、ひとたびある分野に関心をもつと、独創的でみごとな成果をあげる魔力があった。かれは 1921 年に『論理哲学論考』をすでにドイツで刊行していた。他方、ポパーは仕事中毒であり、攻撃的で、支配的で、ねたみ深く、孤独を好む絶対主義者であった。ポパーは 1945 年 11 月『開かれた社会とその敵』をロンドンで出版していた。両者に共通する特徴は、疲れ果てるほど物事を突き詰め、妥協することができず、喧嘩好きで、攻撃的で、寛容さがなく、自己中心的な点にある。また、「周囲のひとり」とは 1910 年にホワイトヘッドとともに『プリンキピア・マテマティカ』を著わしたバートランド・ラッセルである。

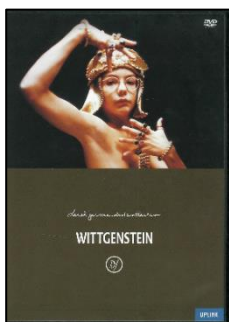
この時の講演の題目は「哲学の諸問題はあるか」であり、上記の会話はその中でやり取りされた一部である。ポパーには生涯の野心が二つあったと言われている。そのひとつは 20 世紀の流行であった言語哲学の理論を打破することであり、もうひとつはかれの生涯に覆いかぶさる「魔術師ウィトゲンシュタイン」に勝利することである。

私はこの大激論の内容そのものではなく、かれらの学問に対する狂気に満ちた姿勢に感銘を受ける。

かれらは真理をゆがめるのではなく、究めるために苦悩しながらも孤独な思索に耽っていた。独創的な思想とはこのような苦しい孤独な思索から生まれるものなのであろう。そして、そのようにして得られた思索の成果だからこそ、それを一流の学者の前で披瀝し、激論を交わすことによって、より真理に迫っていくことができるのであろう。この講演に参加していた者たちはこの大激論を目の当たりにして学問的な刺激を受け、真理追究に対する情熱を感じ取ったに違いない。これらの頭脳集団の多くは文句なく変人である。私はわかりやすい講義に感動することはない。しかし、かりに十分に理解できなくても、深遠な問題について真剣に語られている言葉によって私は学問的に高揚する。この火かき棒事件は真理を追究し続けた偉大な二人の哲学者の不屈の情熱を象徴している。ウィトゲンシュタインは私にとっていまだに「謎」である。

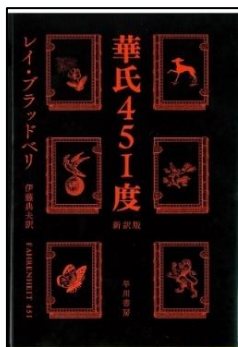
実際には、モラル・サイエンス・クラブでの大激論のような機会に恵まれることはきわめて稀であろう。しかし、著書を読むことによって追体験することができるはずである。次の著書をぜひ読んでほしい。『ポパーとウィトゲンシュタインとのあいだで交わされた世上名高い 10 分間の大激論の謎』デヴィッド・エドモンズ ジョン・エーディナウ 二木麻里訳、ちくま学芸文庫、2016 年。

また、ウィトゲンシュタインの生涯を映画で描いたものもあるので、ぜひこれも鑑賞してほしい。『ウィトゲンシュタイン』デレク・ジャーマン監督、イギリスの文芸評論家であるテリー・イーグルトン脚本、1993 年公開。



◆◆ レイ・ブラッドベリ 『華氏 451 度』 ◆◆

国際コミュニケーション学部教授 R. ライヒェルト



本気で、本を読んだのはいつですか。何度も何度も読むのが大好きな本を持っていますか。

私の好きな作者オスカー・ワイルドは『嘘の衰退』の著書で「何度も繰り返し読みたくなるような書物でなければ、少しも読む価値はない。」と述べています。約40年前に、アメリカの歴史家および著者、バーバラ・ワートハイム・タックマンは、「本は文化の運び手です。もし本がなければ、歴史は沈黙し、文学は安っぽくなり、科学は駄目になり、思考や推測は行き詰まったりします。本は変更の原動力であり、世界の窓であり、時間の海で建てた灯台です。」と述べています。

知識を伝え、広く普及させるのはいいことであると思いますか。そう考えるならば、あなたは心の広い、おそらく教養あふれる人物です。残念なことには知識を抑圧する人がいます。その人たちの性格や気質は異なっているかも知れませんが、しかし共通点があります。その人は権力に執着する人物です。

古代から現代まで人間から知識を奪う方法の一つは焚書です。レイ・ブラッドベリの『華氏 451 度』はこの問題を取り上げています。華氏 451 度は本の着火点ですから、小説の題名になっています。この本で記載されている社会では読書が禁止されています。テレビを手段として、政府は人々の考え方や行動を決定します。

独立した思考は犯罪です。独立した思考は、社会の適合性を脅かす反社会的行動と見られています。消防士の義務は書籍を火で破壊することです。反体制派（読者）は、森の中に隠れなければなりません。隠れ場所では人々は本を読み暗記することになります。そうすると、人々は「生きている本」になります。

今、その話題はどういうふうが続けるのがよいのでしょうか。ぜひ『華氏 451 度』を読んでください。

最後に一言、最近書籍を簡単にインターネット上で公開することができます。またインターネット上のテキストを変更または偽造することが簡単にできます。オリジナルのテキストが操作されたテキストかどうかをどのように判別するのかを考えてください。人間はそのために存在しているのです。考えるために。

◆◆ 多読のすすめ ◆◆

国際コミュニケーション学部講師 大東 万里絵

(本館2階に配架されているリーダー)



皆さんは英語で本を読んだことがありますか。「英語の教科書なら読んだことはあるが、一般の本を英語で読んだことはない」という人も少なくないと思います。「学習のために読む」ことは「精読」と呼ばれ、語彙や文法を確認しながらゆっくり読むため、読書の楽しみを味わうまでには至らないことも多いでしょう。外国語を最も効果的に修得する方法は楽しみながら学ぶことです。母国語で好きな本を楽しむように、外国語でも流暢な「読書力」を楽しく身につけられる方法があります。それが「多読」です。

言語能力の向上において、多読には多くの利点があります。多読ではさまざまな文脈の中で何度も同じ単語や文型に触れるため、語彙力や文法力だけではなく、言葉の使い方が自然に身につく、読解力や推測力が養われます。また、たくさん読むことによって、より早く流暢に読めるようになります。その結果、言語学習における自信ややる気が増し、学習効果を生むことができます。

流暢な読書力を身につけるためには、最初は易しい本を読むことから始めます。難しい本に挑戦したいという人もいますが、難しすぎる本を選んでしまうと、理解度が下がり、読むスピードも遅くなるため、読書が楽しめずやる気も下がってしまう可能性もあります。

次に、多読の三原則をご紹介します。

1)辞書を引かない。2)わからないところは飛ばす。3)進まなくなったらやめる。

辞書がないと読めない本は不向きです。全て理解する必要はなく、8割程度内容が理解できればその本は読めたことになります。また内容がつまらなければ、無理をして読み続けずに、別の本を選ぶことも大切です。

北陸大学太陽が丘キャンパスの図書館には、洋書がたくさんあります。これを読んで多読に興味を持った人や英語での読書力を伸ばしたい人は、ぜひ図書館で英語の本を手にとってみてください。英語のレベルに応じたリーダーが、初心者向けのものから、難しいものまで揃っています。



◆◆ ひとと本の出会い ◆◆

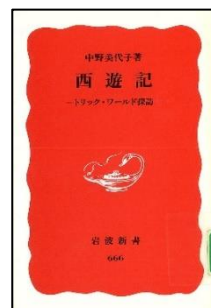
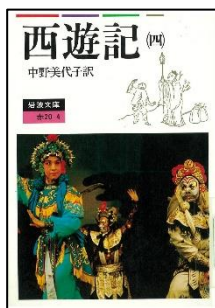
医療保健学部准教授 佐藤 妃映

私はこの8月に平成遣中使・大学生文化交流団の引率として、中国天津を訪れました。初日の歓迎会は他の研修班と合同で開催され、国際コミュニケーション学部の村田和弘先生の隣席になりました。研修では他学部の先生方とお話する機会があり、大きな楽しみになっています。

村田先生のご専門である中国明清文学についてお話を伺っていたところ、『西遊記』の話になりました。『西遊記』は、小さい頃から絵本や漫画、映画などで親しみ、みなさんもよくご存じでしょう。でも、幼い頃に読んで以来、今まで読み返すことはありませんでした。村田先生によると、『西遊記』に登場する煉丹術など、ひとつひとつに深い意味や著者の思いが込められているそうです。これまでこの本で起こる出来事に疑問を持ち、意味を考えたことはありませんでしたので、はっとしました。

現在では、当時の社会背景や解釈を盛り込んだ新訳が出版されているようで、ぜひ読んでみたくなりました。お薦めは、“岩波文庫『西遊記』呉承恩作；小野 忍訳（1～3巻）、中野美代子訳（4～10巻）”とのことです。こちらは本学の図書館にあります。図書館には他にも、中野美代子さんの『西遊記：トリック・ワールド探訪』があります。新しい発見や驚きがあるのだと思うと、胸がわくわくします。それに今読むことで、以前とは異なる印象を持ち、何か気づくことがあるかもしれません。また、当時の自分を振り返り、今の自分を見つめ直す機会にもなるのではないのでしょうか。みなさんにも、再読することをお勧めしたいと思います。今再びページをめくってみたいと思う本を、心の中で問いかけてみてください。

今回の研修では、ひととの交流を通して、読み直してみたい本、新たな本と出会うことができました。ひとと本との不思議なつながりを感じています。これからみなさんにも、人生の中でこのような機会が訪れることでしょうか。なかなか読書をする時間が取れないかもしれませんが、不思議な縁で出会った本を大切にしたいと思います。



◆◆ 知の拠点 ◆◆

医療保健学部准教授 濱田 敏彦

以前勤務していた福井大学には、駐車場から附属病院へ向かう通路横に図書館があります。再整備により改装された図書館の閲覧室は全面ガラス張りとなっており、毎日帰宅時には静かに夜遅くまで勉強している多くの学生さんが見えます。私はこの光景がとても好きでした。もう30年以上も前になりますが、学位論文を完成するために毎日この図書館に通い、関連するジャーナルを読み漁り、文献検索に明け暮れていた頃を思い出させてくれます。今のようにIT化は進んでなく、洋雑誌製本がある書架で過去の文献を探し、重い製本を何冊も閲覧室へ持って行き、読んで解らない点があれば直ぐに専門書で調べることができる図書館は、時間が経つのを忘れる場所でした。

現在では、インターネット環境が整い電子情報サービスも充実しデジタル化により格段に効率性はよくなっていますが、図書館はいつでも多様な書籍に触れることができる「知の拠点」の場です。IT化が進んだ現代社会では、利便性に頼らずゆっくりと書籍に触れる時間はとても大切だと思います。是非ともみなさんには、身近にある図書館を利用して「アナログな時間」もとってほしいと願っています。



先日、委員会の帰りに図書館入口前のワゴンに貼ってあった「ご自由にお持ちください!」という文字が目にとまりました。せっかくなので、『アウェー脳を磨け! 茂木健一郎 著』を手に取りお盆休みに読みました。また新しい発見ができたかなと思っています。

◆◆ 寄贈図書 ◆◆

本学の役員・教職員から、下記のとおり図書の寄贈がありました。紙面を借りて厚く御礼申し上げます。

書名	寄贈者
『ポルシェ太郎』他	計28冊 泉 洋成 (理事)
『生活習慣病骨折リスクに関する診療ガイド2019年版』他	計36冊 三浦 雅一 (理事・薬学部教授)
『人間にとって成熟とは何か』他	計3冊 南野 茂 (理事・事務局長)
『岐路に立つ指定管理者制度 変容するパートナーシップ』	桧森 隆一 (副学長・国際コミュニケーション学部長)
『マーケティング部へようこそ! 3Cも4Pも知らない 新入部員が3週間で身につけた最新市場戦略』	五味 一成 (経済経営学部教授)
『すとまんが がんまんが 人工肛門編』	倉島 由紀子 (薬学部講師)
『行政法 第5版』他	計7冊 佃 貴弘 (経済経営学部講師)
『最新臨床検査学講座 遺伝子・染色体検査学』他	計5冊 滝野 豊 (医療保健学部講師)
『シンプル衛生公衆衛生学 2018』	長原 三輝雄 (医療保健学部講師)

北陸大学図書館報 NO. 47 令和元年10月15日発行

編集・発行：北陸大学図書館 〒920-1180 金沢市太陽が丘1-1 TEL. 076-229-3021 FAX 076-229-4850
Eメール：tlib@hokuriku-u.ac.jp 北陸大学図書館ホームページ <https://www.hokuriku-u.ac.jp/about/campus/library/>